

音 合 の 町 崎 黒

新聞からたどる黒崎の歴史 (五十五)

双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

昭和二十一年、新潟巡業に来た郷土西蒲出身の横綱羽黒山は、詐欺師の裏にはまってしまふ。

(先月号からの続き)
双葉山最後の相撲を白星で飾る。

双葉山は初日小結相模川と対戦、相模川は男女ノ川に次ぐ巨漢で突つ張りを得意とし、幕下時代から、いまに双葉山を倒すだろうと期待されていた。当日、相模川は長身を利してのど輪で攻めたが、双葉山はこれをはずして右四つになり正面に寄り切った。しかし、初日は出場したが、面打を思つて二日目から休場。その後はもう土俵に上がることはなかったから、この初日の相撲が双葉山の最後の相撲となった。

双葉山が、今日に残る六十九連勝の大記録を目指して奮進し始めた昭和十一年、筆者は、まだ小学校の三年生位だった。翌十二年に日中戦争が始まったが、それと同時に軍国主義政策が次第にきびしくなり、国民にとつての娯楽といえれば相撲位しかないというそんな時代だった。だから、どこの市町村でも相撲熱が盛んで、次に紹介する

郷土西蒲原出身の名横綱羽黒山が、その二、三年前に立浪部屋に入門したばかりのころでもあった。

横綱双葉山のプロフィール
双葉山定次(一九一九〜一九六八)、三十五代横綱、大分県生まれ、本名種吉定次、昭和二年(一九二七)立浪部屋に入門、昭和七年(一九三二)一月春秋園事件で大量脱退力士が出たので十両から特進入幕、昭和十一年(一九三六)五月関脇に昇進してからにわかに強豪ぶりを発揮し、前人未踏の六十九連勝の大記録を樹立した。その間昭和十二年(一九三七)一月大関、同年五月には全勝三連覇で横綱に推挙された。百七十八センチ百二十四キロ(全盛期は百三十五キロ)の均整のとれた体格で、左差し右上手を取つての投げは無類の強さで、双葉山の姿をひと目見ようとファンは前夜から国技館の周囲を取り巻くという双葉山時代を招来し、長く沈滞した相撲界を復興させた。現役のころから双葉山道場を創設し

て弟子を養成、昭和二十一年(一九四六)一月引退して時津風を襲名し、一代で大部屋に発展させ、横綱鏡屋を始め二十数名の幕内力士を出した。優勝十二回の内全勝八回、昭和三十一年(一九五七)理事長に就任して相撲界の近代化に努めた。政府から従四位勲三等が贈られた。

郷土西蒲出身の横綱羽黒山
昭和二十一年八月十四日記事
うっちゃり食つた羽黒関
うまうまやられた七千五百円

八月十四日から二日間、新潟市で巡回興業のため乗り込んだ横綱羽黒山が、宿屋で現金七千五百円を盗まれた。十三日の夜西堀通四俵屋旅館に入った羽黒山は、七千五百円を本の間に挟み床の間に上げて置いたところ、十四日朝消えてなくなつていたので警察へ届けるやら、探し直すやら大騒ぎとなった。犯人については新潟署で厳探中で

あるが、昨夕四時過ぎ羽黒山の指定宿俵屋旅館へ現れたワイシヤツ、半ズボンに眼鏡をかけ、頭髪をかけた二十四、五歳位の男を怪しいと睨んでいる。この男は一行の到着に先立って「羽黒関に会いたいのだが」と如何にも知人らしく振る舞い、色紙らしい紙包みを小脇に羽黒関の部屋に落ち着き、七時ころ一行が到着するや風呂はこちらだとかなんだとか世話をやいた。羽黒山は同人を番頭と考えたらしく、「子どもの命日だから果物を買つて来てくれ」と七千五百円の中から二百円を渡し、残り

を本の間に挟んで置いたが怪しい男は帳場で「果物を買つて来てくれ」と命じて旅館の金で買わせ二百円を着服。その後、羽黒山が風呂に入った部屋を明けたりしているうちに八時ころ「大野屋に居るから用があつたら電話をかけてくれ」と言つて姿をくらましてしまった。旅館では今朝になって大金の紛失に

弁を使つていた好い男で今更のように怪しいと思われる。まあ一切は警察に任しておいたから直きつかまるだろう、刑事さんに宜しく……。

郷土西蒲出身の名横綱羽黒山をだました詐欺師の話
昭和二十一年八月、お盆の十四日と十五日の二日間の新潟巡業のため、十三日の夜、羽黒山一行が新潟市西堀通四の俵屋旅館に到着した。ところが、ひどい奴もあつたもので、何も知らない羽黒山にその時すでに、詐欺師のわながしかけられていた。一行の到着する少し前、俵屋旅館を訪れた二十四、五歳の怪しい男。さも羽黒山の知人のようにふるまふ、羽黒山の部屋に入られてもらう。少しおくれ羽黒山が旅館に着くや、早速かけつけて、あれこれと世話をやいて旅館の番頭さんと信じこませる大狂言を、さすがの羽黒山も見破ることができなかった。それにしても巧妙な手口を新潟日報は、「うっちゃり食つた羽黒関」と書いている。

「まあ一切は警察に任しておいたから、その内につかまるだろう。刑事さんによろしく」と言つて羽黒山は新潟を発つたというが、この犯人つかまつたのだろうか。



詐欺にがっかりする羽黒山

気づいた。宿ではその男の計画的な犯行ではないかと思つている。御難の羽黒山は語る。

「その男があまり世話をやくので宿の番頭さんだと思つていた。そう言えば東京

※注 七千五百円というとき、時大野町の人夫の日当が一日七十円位だったからかなりの大金である。

(続く)